

だった。

一変して、当管弦楽団の委嘱作品である《童謡とナンセンスな詩》世界初演は、これから少なくともドイツ語圏の室内オーケストラではレパートリーとなるであろう、興味深い楽曲の誕生に居合わせる喜びを実感した。作曲したのはクラリネット奏者のイェルク・ヴィドマンだが、驚くべき彼のもう一つの作曲家としての顔には、シュルトも終演後のパーティで「天才」と定義していた。アマルコルドの起用も成功を助け、厳格な中世の歌唱法から一転して、カバレッティスト（コメディアン）のような才能を見せ、笑いを誘っていた。

休憩後はシューベルト「交響曲第8番《ザ・グレート》」だ。前半でこれだけの多様性を聴かせた後に、王道レパートリーのための集中力を持続させるのは困難だろう。シュルトは身体全体を駆使しながら団員の士気を高める。符点の明確さ、短いフレーズでもレガートを徹底させてコントラストを明確にし、ディナミック（強弱）を際立たせて、やっとのことで盛り上げ、第1楽章を終えた。第2楽章は美しい*p*を聴かせ、主題の復元部などアクセントごとにものすごいパワーを注ぐ。フレーズを揺らすのがうまく、オーケストラも一生懸命ついていく。憧れを想起させるような目を泳がせる指揮者の意図を読むように、心のこもった音が紡ぎ出され、フィナーレでは走らない、地に足のついたテンポ感で、見事に演奏しきった。

シーズン・オープニング・コンサート後は、全聴衆がビールとプレッツェルに招待されスピーチを聞くのだが、首席指揮者と楽団の蜜月は今シーズンも継続していた。（中東生）



ミュンヘン室内管と2年目のシーズンを迎えたシュルト
©中東生

Concert シュルト&ミュンヘン室内管、 2年目のシーズン・オープニング

クレメンス・シュルトが首席指揮者となって2年目、ミュンヘン室内管弦楽団のシーズン・オープニング・コンサートを10月19日にプリンツレーゲンテン劇場で聴いた。

まず、クセナキス《ヒケティデス》のような現代曲でも、1秒たりとも飽きさせない表現力に感心させられた。

続くカルロ・ジェズアルドの「5声によるマドリガーレ」では、アンサンブル・アマルコルドの5人が、観客を一気に中世へ連れて行く。豊かな響きの通奏低音を筆頭に、5人とも完璧なアンサンブルで、彼らの知名度を裏付ける緻密な演奏